

首都大学東京 総合研究推進機構NEWS

Miyacology

首都学
ミヤコロジー

首都大の研究の今を伝える

Summer
2018

2号



特集

株式会社アールストア
代表取締役

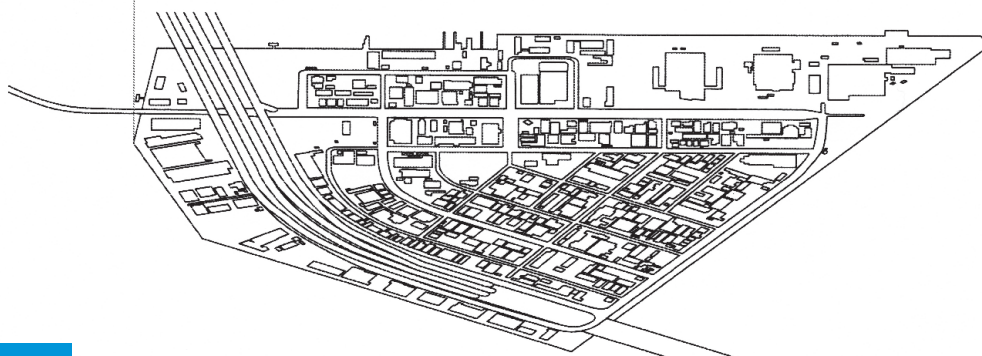
首都大学東京
副学長

浅井佳 × 吉川 徹
都市と建築、文化を
ひっくり返す
眼力

Close-Up TMU Research

進化遺伝学

田村浩一郎



◇東京都の公立大学「首都大学東京」はさまざまな研究を通じて、大都市・東京の抱える問題の解決とその未来に貢献しています。さらに都市と地域、人間と自然、生活と社会、日本と世界をつなぐ架け橋へ——首都東京が生み出す学問の力を「ミヤコロジー＝首都学」と名付け、紹介します。

Topics

国際交流協定校

英国・レスター大学
訪問記

浅井 佳 × 吉川 徹

都市と建築、文化を ひっくり返す眼力

これからの都市と建築はどうあるべきなのか。

首都大学東京の都市環境学部建築学科では、学生一人ひとりの都市観や建築観を、ユニークな講義やプロジェクトベースの体験型授業によって、徹底的に鍛え、養っていく。その教育者を長く務め、現在は副学長でもある吉川 徹氏と、鍛えられた眼差しによって不動産やホテルの斬新なあり方を社会に提案する浅井 佳氏に、大学での学びや研究、新規事業開発の思いを語っていただいた。

浅井 佳 Kei Asai

静岡県生まれ。2001年東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻修了。01年より株式会社イデー勤務。家具から内装、建築まで幅広いプロジェクトに従事。06年よりイデー・アールプロジェクト株式会社に移籍。多数の不動産ディベロップメントプロジェクトに携わる。09年株式会社アールストアを創業し代表取締役任に。15年には新たにBOOK AND BED TOKYOを開業し、ホテル事業に参入。

吉川 徹 Toru Yoshikawa

東京都生まれ。1987年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。東京都立大学工学部建築工学科助手等を経て、09年首都大学東京都市環境学部建築都市コース教授。博士(工学)。17年より首都大学東京副学長(研究・都連携担当)。研究分野は都市計画・都市解析。(社)日本都市計画学会、(社)日本建築学会、多摩ニュータウン学会等で学会活動を行う。02年第5回法政大学「多摩地域研究奨励賞本省」受賞。

柴田 徹 (司会／URA室 主席URA・主任研究員) 「Miyacology」第2号の対談には、本学のOBで起業家として社会の第一線でご活躍されている浅井佳さんをお迎えしました。建築学科教員である吉川徹副学長とともに、学生時代の思い出や、首都大らしさとは何か、またお二人が追究しておられる都市や建築へのお考えなどについて語り合ってください。

吉川 徹 私の専門は都市計画と都市解析です。もう少し詳しく言えば、都市計画を立案する際の基礎となる分析を行う、いわば都市のアナリストです。地域施設をどのように配置すれば最も利便性が得られるのかを、数理モデルを使って算出するといったことをしています。

柴田 昨年度(平成29年度)から就任された

研究担当副学長というのは、どういうお立場ですか。

吉川 かくも面倒くさいものです(笑)。本来、大学における研究は各自が勝手にやるべきものですが、私に求められているのは、皆さんが勝手にやることを調整する役割が一つ。もう一つは、首都大にふさわしい研究プロジェクトを立ち上げて、世の中に知らしめることです。大学の研究者も事務局も、さらには東京都も「なるほど、それなら首都大らしいんじゃないの」と納得できる方向性を打ち出すという非常に重要な役割を担っています。

大学時代に身につけた 旧態依然をうち破る思考回路

柴田 「首都大らしさ」は、先生方と既卒者、学生の創り出すものが相まってできるものかと思います。その意味でも浅井さん

は影響力の大きい卒業生のお一人です。浅井さんが現在展開している事業の概要についてお聞かせください。

浅井 佳 2009年に立ち上げたアールストアは、簡単にいえば不動産仲介業で、R-STOREというウェブサイト上だけで展開しています。初めは、大学で建築を勉強した僕が、好きな建築や建築家の設計の良さを広めたくて、それらの物件を紹介するサイトとして考案したんですが、やっていくうちに、古い住宅の中にもデザイン性や住みやすさの点で惹かれるものがあることに気づいたんです。ちょうどストック活用や空き家問題が注目され始めた時期でもあったので、空き物件の中で僕らのセンスに引っかかるものを集めてリノベーションし、「かしこいコンパクト」や「東京ノスタルジー」といったある種ポエティックな用語を添えて紹介するスタイルにしました。

柴田 建築学科ではどんなことを学んだのですか？

浅井 在籍したのは小林(克弘)研究室で、建物の意匠が研究テーマでした。そこでは物事を多面的に解釈することが求められました。例えばオフィスを設計するとして、世の中で言われているブラック企業の問題や働き方改革といったものを、設計としてどう表現していくのかを考えさせられるんです。オフィスなら四角い空間があればいい、では許されない圧力がありません。

吉川 出る杭を徹底的にたたくのが、建築学科の教育ですからね。「その提案には新しさがない」とか「最新の社会の要求に対してあなたはどうか考えているのか」と突っ込まれたでしょう(笑)。

浅井 はい。物事を斜めから見るような思考回路も在学中に養われたと思います。だから僕には、今の不動産業が旧態依然た

るモデルに見えたんです。

柴田 建築学科の教育が浅井さんのような卒業生を生み出したんですね。

浅井 他の大学に比べて、首都大にはいい意味での緩さを許容してくれる部分があったと思います。全員がエスキース(設計の概念スケッチ)の講評を受けられるという学生数の少なさがよかったのかもしれません。

吉川 首都大は教員の人数もちょうどいい。少なすぎると授業のバラエティが損なわれますが、建築学科には教授・准教授が14人もいます。そうすると、建築の基本的な枠組みだけを教えるのでは人が余ってしまうので「ひとり1ヘンな授業」みたいなことがなされる。例えば、建築史では、西洋建築史と日本建築史はどこにでも必ずありますが、首都大にはなぜか東洋建築史を教える先生もいる。浅井さんのころにもサマルカンドの写真やカタールのビジョンタ

ワーなど、ストックしている写真を見せながらの授業があったのでは？

浅井 そうです。そういう“趣味の時間”みたいな授業が面白かったですね(笑)。

ホテルの部屋はステレオタイプでいいのか？

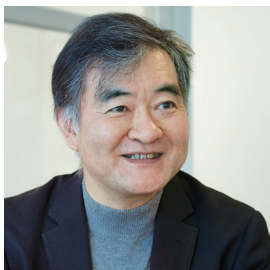
柴田 今回の取材に先駆けて、浅井さんがもう一つ手掛けているBOOK AND BED TOKYOに泊まってみたのですが、あのスタイルはどのような発想から生まれたのでしょうか。

浅井 BOOK AND BED TOKYOでホテル事業に参入したのは2015年で、既存のものを上辺だけ変えても面白くない、という思いがありました。ホテルというのは古いビジネスモデルのままずっときていて、どのホテルの部屋も全て四角い部屋にベッドとバス・トイレがあるというスタイルです。五

アールストア目黒本社にて

つ星のリッツ (RITZ-CARLTON)も5千円のビジネスホテルもそのスタイルは変わらない。つまりホテル業態自体へのチャレンジがまったくなされていない、ということに対してムラムラときたんですよ(笑)。

吉川 僕は図書館担当副学長も兼ねていますが、その立場からすると、本に囲まれて寝るというのはなんて面白い発想だろうと思いました。



浅井 閲覧室で寝るのって至福の時間ですからね。

吉川 それから、あまりお金がかかっていないところもいいですね。本は使い減りのしない資産です。すでに減価償却が済んでいて、小さな予算で展開できるというのがいい感覚だなと思います。先ほどのR-STOREの事業にしても、既存ストックの活用というのはそもそもがローコストオペレーションです。躯体の部分には投資していませんからね。それを、若くてセンスのいい建築家がリノベーションしてオンラインで提示する。彼らに対して自分の力を試す機会を提供しているという点でも素晴らしいです。

まだ見ぬ「カッコいい」が都市の中で創発されていく

柴田 東京の街にある建築のストックを、リノベーションして付加価値をつけ、ビジネスに乗せていくというのは、社会的にも意義のあることだと思います。

浅井 ありがとうございます。ですが僕たちにはむしろ、新たな建物を環境負荷を高くして建てるよりも、既にあるものを有効活用するほうがカッコいいじゃん、という感覚があるんです。それをある種ファッションみたいな部分にうまく響くように練っていくと、若い世代が食いついてくれます。東京

のマーケット自体が、そういうところに価値を見出しつつあると感じています。

吉川 ここで「カッコいい」というキーワードが出てくるのは素晴らしい。でもそれは、我々にとって、圧倒的に怖いキーワードでもあります。建築学科の教育は、いわば何をもってカッコいいのかを探求する教育で、そのカッコよさというのは、デザインや今まで見たことがない形のカッコよさもありますが、それだけではないんです。例えば、構造の先生が、「なぜこんな形が支えられるか」といえば実はこんな工夫があるからです」と解説すると、学生たちは「なんてカッコいいだろう」と思うわけです。私が専門にしている都市分析の分野でも、東京に点在するパン屋の暖簾分けの分布について書かれた本があるのですが。

浅井 面白そうですね(笑)。



吉川 都市の現象をそのような思いもかけなかった切り口ですっきり説明できると、建築学科の学生はだいたいみんな「カッコいい」と思うようです。そして、先ほど「カッコいいは怖い」と申し上げたのは、その感覚というのが非常に説明しにくいからです。何にカッコいいと感じるのかは、教員にも、下手をすると自分自身にも読めません。浅井さんのお話が素晴らしいのは、従来の物的な価値をひっくり返してカッコいいと見直すことができる点です。新たな価値を創り出す非常に優れた先端的な感覚が、ストックの活用をカッコよくして、メディアを通じてその問題提起が幅広いところで受け入れられています。それには我々教員も、「参りました」「やられました」と感じるころが多くあります。

柴田 「カッコいい」と言い切れる浅井さんがカッコいいですね。

浅井 建築の世界だけに限らず一般のマー

ケットがそういう文脈になりつつあるところに、僕らがビジネスを放り込んだということだと思います。

柴田 でも、放り込むのには覚悟と勇気が必要ですね。



浅井 確かに勇気は必要でしたね。

吉川 それからもう一つ大事なのは、放り込んだ価値観が螺旋状に自己発生して、複雑系経済学でよく言われる「創発」のプロセスが生じていることです。成熟して生活のあり方を見直そうとしている社会に、ストック活用はカッコいいという言説が始まると、自己拡張を遂げて社会全体がそのことを発見していくという。

浅井 僕の好きなスティーブ・ジョブズが、「消費者は、自分の欲しいものをわかっていない。それが形になり、目の前に提示されて初めてこれが欲しかったと気づく」と語っています。実は、僕らの会社はほとんどマーケティングをしていません。経営としては乱暴ですが、「この商品が魅力的なら、どこにあっても人は集まるだろう。だからまずは突っ込んでみよう」という感じでやっているんです。

吉川 建築学科で教えているのも、まだ見たことがなく価値の定まらないものです。

柴田 それがつまりカッコいい、ですね。最後に素敵なキーワードで締めくくっていた

だき、ありがとうございました。

首都大学東京 総合研究推進機構 HP
ウェブでもご覧いただけます。

<https://tmu-rao.jp/miyacology/3867/>



国際交流協定校

英国・レスター大学

訪問記

首都大学東京は、教育研究交流や学生交流を目的として、海外の大学や研究機関と協定を結んでいる。その一つである英国・レスター大学 (University of Leicester) とは、共同研究や学生交流などで親交を深めている。2018年3月28日～4月1日に大橋隆哉国際化担当副学長がこの大学を訪問し、より多面的かつ活発な交流の促進について意見交換を行った。

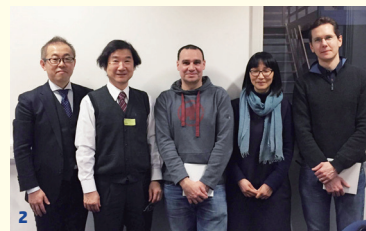
レスター大学は1921年創立の歴史ある総合大学で、日本では秋篠宮眞子内親王殿下が留学されたことでも知られています。この学園を有するレスターの街はイギリスで最も古い都市のひとつであり、古代ローマ時代から2千年の歴史があるそうです。現在でも築百年以上の煉瓦造りの古い建物が点在しています。私たちが訪問した頃は、ちょうど何十年来という強烈な寒波がヨーロッパ中を覆いつくしていた時期と重なり、レスターも毎日マイナス5℃で吹雪という異常な天候でした[写真1]。

キャンパスは市街の中心部からほど近いところにあり、それほど大きな規模ではありませんが、赤煉瓦の校舎も多く、周囲は緑で囲まれ、いかにもイギリスらしい大学といった風情です。私たちが訪れた、Leicester Institute of Structural and Chemical Biology (LISCB) は、大学の研究戦略に基づいて2016年に設立された研究所であり、細胞生物学や構造生物学から、感染症や免疫学まで、幅広い22の研究グループで構成されています。今回は、本学と共同研究を行う構造生物化学分野の先生方を中心に訪問し、研究概要を伺うとともに大型実験施設を視察させていただきました。

LISCBを拠点とする細胞内NMR (Nuclear Magnetic Resonance = 核磁気共鳴)の研究では、生体内でのタンパク質の一分子の形の変化を捉えることができます。例えばがん化の原因となるタンパク質が、がん化に伴いどのように形を変え、活性を変化させるのか、細胞内での一分子の挙動を解析できます。また、LISCBでは昨年、多額の資金を投入してクライオ電子顕微鏡[写真3]を導入したそうです。クライオ電顕は17年のノーベル賞を受賞した技術であり、これまでの結晶構造解析ではわからなかった、より生体内の状態に近い生体分子を原子レベルに近い分解能で観察し、立体構造を明らかにできるといいます。

本学とレスター大学は、先述のように構造生物化学分野での共同研究を既に始めており、これらの最先端機器を用いた研究がさらに発展するものと期待されます。

(文：URA室 主幹URA 十津川 剛)



1. 吹雪のレスター大学。キャンパス内は歴史と風格が滲んでいる

2. 左から筆者、大橋隆哉副学長、Dr. Dominguez、Dr. Tanaka、Dr. Watson

3. クライオ電子顕微鏡と室長のDr. Savva



Voice

レスター大学との共同研究——最先端の研究設備と英国の歴史が育んでくれるもの

NMR分光学、構造生物学

伊藤 隆 教授 [理学研究科 化学専攻]

レスター大学とは、核内RNA結合タンパク質の細胞内NMR解析と、NMRデータ解析ソフトウェアCCPN AnalysisAssignの共同開発を行っています。この大学に限らず欧米の有力な大学に概ね共通していえることですが、研究環境には、生体高分子用のNMR装置やクライオ電子顕微鏡などの機器類や、生命科学を支援する組織体系(タンパク質発現系の構築、培養細胞の管理など)が、きちんとした戦略と方向性のもとで共用できるよう整備されていて、有力な若手研究者が短期間で優れた研究結果を出し得る場となっています。

研究者として生き残るためには、国際連携を密にすることはもはや必須であろうと思われます。学生の皆さんには言語の習得と共に、伝えるべき中身(主体的な考え方、教養)を充実させるよう心がけてほしいと思います。

分子生物学

廣田耕志 教授 [理学研究科 化学専攻]

レスター大学との共同研究では、がん遺伝子として知られるras(ラス)遺伝子について、特に、ヒト細胞でのras遺伝子への変異導入実験を進めています。また交流活動では、合同シンポジウムや、修士学生の3カ月間派遣留学、田仲加代子先生を首都大にお招きしたセミナーなども実施しました。

この大学では、ロジカルライティング技術などの高度な英語教育を受講でき、最先端の分析機器(クライオ電子顕微鏡やNMR、質量分析装置など)を使った研究が行えるメリットがあります。留学する皆さんには、国際交流を通じて語学力を向上させたり、異文化に触れることで教養を充実させたりすることに加え、主体的に自分で考えたことを英語で議論しながら国際共同研究を推進し、研究者として成長できる機会にしよう心がけてほしいと思います。

進化遺伝学

田村浩一郎教授 Koichiro Tamura
[理学部生命科学科]

Interview

生物の進化を「MEGA」でひもとく

生物はなぜ進化するのか。その大きな謎に動かされ、田村浩一郎教授は、遺伝情報を入力すると進化系統樹が出力されるソフトウェア「MEGA」を海外の研究者とともに開発。そして現在、MEGAとショウジョウバエを使った実験を組み合わせることで、生物がどのようにして進化したのかを再現しようとしている。MEGAと進化遺伝学研究の今を伺った。

インタビュー:十津川 剛 (URA 室 主幹URA)

進化遺伝学と「MEGA」

—— 初めに、進化遺伝学の概要を教えてください。

読んで字のごとく、「進化」を「遺伝学」を使って研究する学問です。生物の進化では、地球の歴史上で生物が変化していきますが、遺伝は、世代を通して遺伝情報をコピーして伝えていますから普通は変化しません。では、なぜ生き物は変わっていくのか。そのメカニズムを研究するのが進化遺伝学です。——その研究をつきつめると、生物の何が分かるのでしょうか。

地球上の全ての生物が遺伝情報をもっています。全生物の共通の土台であるそのゲノム（遺伝情報の総体）を比較することで、生き物同士の関係を知ることができます。例えば、クジラとイルカは、今は流線型の体で海を泳いでいますが、かつては陸に生きる哺乳類でした。では、どんな動物と近い関係があると思いますか？ 東京工業大学の岡田典弘教授らが遺伝情報を調べたところ、カバに近いことが分かったんですよ。

——なるほど。そうした生物の遺伝情報の関係を調べるのが「MEGA」の役割なのですね？ ところで、今やMEGAは世界中で使われていますが、先生はいつ頃から

開発しているのですか？

僕がアメリカに留学した1991～93年に、当時のボスから勧められて開発を始めたので、もう25年前になります。その頃の仲間で今はテンプル大学にいる研究者とは、今でもコラボレーションを続けています。現在はバージョンXを開発中で、今年中をめどに完成させるつもりです。「X」は「クロスプラットフォーム」の意味があり、これまでWindowsでしか使えなかったMEGAが、LinuxやMac OSなど全てのプラットフォームで利用できるようになる予定です。

——田村先生は、ご自身でもプログラムを書かれるのですか？

今は計算のコアとなる技術的な部分は自分で書きますが、インターフェース等はアメリカでプログラマーに書いてもらっています。——IT的な部分と生物学的な部分の双方をお一人でご研究なさる数少ない存在なのですね。

情報学の研究者がつくる技術を、生物学の研究者が使いやすいようにするのが生命情報学の役目です。例えば、ヒトのDNAの塩基配列は約32億の文字で書かれていて、近年では、塩基配列を解析する機械（次世代シーケンサ）の性能が上がり1人分のゲノムが「千ドルゲノム」、つまり約10万円で解

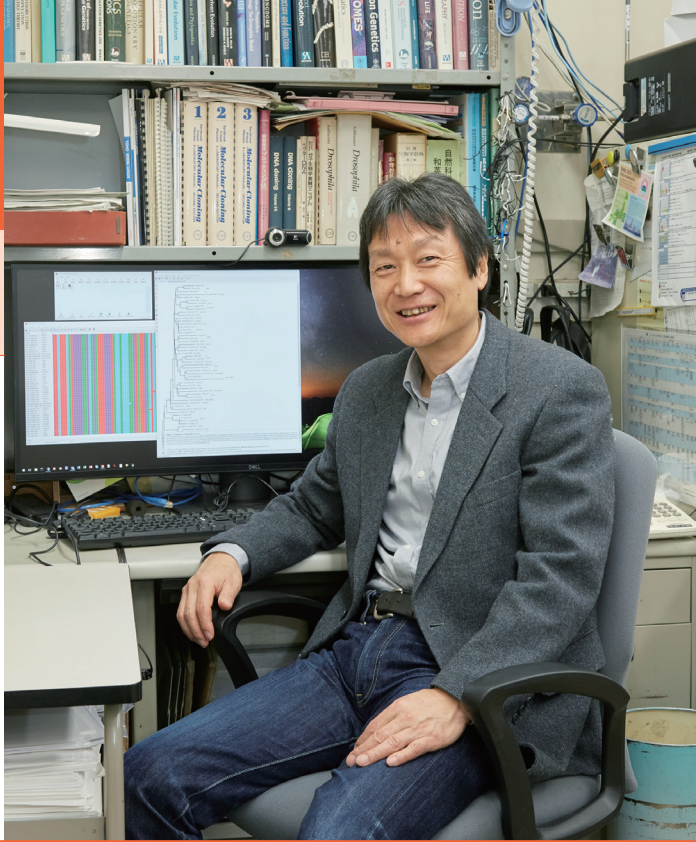
析できる時代になりました。ですがその結果は、32億の文字が数百ピースに分かれ、1ピース約1000万文字のミンチの状態で出力されます。それらをコンピュータでつなげる必要があるのですが、そのときに生命情報学による意味づけが求められます。わかりやすく言うならば、「十津川さん／お昼／ご飯／食べる」というピースを「ご飯を／食べる／お昼が／十津川さん」ではなく、「十津川さんが／お昼に／ご飯を／食べる」となるように。そんな研究開発が行われています。

我々は、タッチスクリーンといったハードウェアの進化にMEGAを対応させていったり、2年で10倍の速度で効率化する次世代シーケンサの進歩に合わせてMEGAの処理スピードを高めるための理論研究なども行っています。MEGAで成果を出した研究者から、使い勝手についての意見を仰ぐといった、まるで企業の商品開発のようなこともしていますよ。

生物の進化を実験で再現する

——MEGAを使ったご研究で田村先生が今最もご興味のあるテーマは何ですか？

生物がどのように温度変化に適応して進化するのかです。生物学の研究では、実験的再現が基本的な検証方法です。生物の

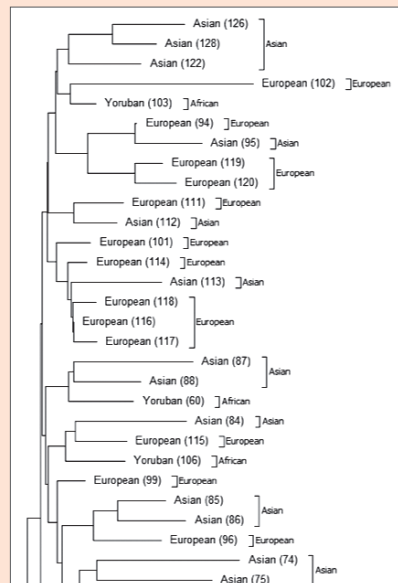
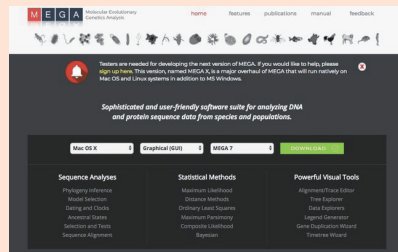


lab scene

1 MEGAを使った進化系統の解析

MEGA (Molecular Evolutionary Genetics Analysis) は、DNAやタンパク質配列データから、分子進化・系統学的解析を行うソフトウェアで、ネットで公開され誰でもダウンロードできる（右上はそのウェブ画面）。分子系統樹推定に加え分岐年代測定や遺伝子重複の自動判別など、賢い機能が備わっている。使用する塩基配列データは、DNAシーケンサのデータ、Webブラウザの検索機能で取得されたネット上のデータベースからのデータ、直接入力によるデータを入力することが可能。MEGAを世界中の生物学研究にさらに役立ててもらうため、現在、オープンプラットフォーム化を目指したMEGAXを開発中。ゆくゆくはオープンソース化（ソースコードの公開）も検討されている。

右下の図は、MEGAでヒトのミトコンドリアDNAの遺伝情報から解析した進化系統樹。「系統樹を見ると、ヒトの形質のほとんどは人種を超えて等しく、進化系統における人種は混ざり合っていることがわかります」と田村先生。MEGAは私たちに、外見の差異に左右されない新たな生物の見方をも与えてくれそうだ。



進化については、例えば5億年前と現在とをタイムマシーンで行き来することはできませんから、これまでは地震学や気象学など他の地球規模のサイエンスと同様に実験的再現が不可能な学問と考えられてきました。ところが、進化生物学においては、その再現が可能になりつつあります。というのも技術が進み、全ての生物の遺伝情報を読むことやそれらを編集することも夢ではなくなってきたからです。それらの技術を使えば過去の生物を再現することももはや夢ではなく、微生物を使った実験進化は既に始まっています。その対象をもっと広げるため、我々の研究室ではショウジョウバエを使って実験進化にチャレンジしています。

——では、先生の実験によって、もしかすると100年後のハエの姿を見ることができると？

いえ、再現しようとしているのは姿ではなくて特定の形質です。例えば寒冷地にすむユキヒョウは、毛皮の色が白いのですが、その外見だけでなく、生理学的にも寒さに

lab scene

2 環境温度の変化による進化の実験

田村先生の研究室では、ショウジョウバエを飼育して、温度の異なる環境下にすませ、遺伝情報にどのような変化が生じるかを、日常的に実験している（写真下2点）。研究室には、最新鋭の次世代シーケンサやハイスループットPCRが設置され（写真上）、48個体×48種類の遺伝情報を一気に解析できる。そのマシンを所持する研究室は日本でも珍しく、他の大学からもよく使いにくるという。



強い性質をもっています。そのような生理学的な性質は速く進化するので、我々はその速さを利用して研究を行っています。今進んでいる分子生物学の技術とゲノム解析の技術を組み合わせることで、今後は、映画「ジュラシックパーク」のように生物の進化を目の前で再現することが本当にできるようになるかもしれません。

——すごいですね。そのような最先端の研究では国際化が鍵になると思われます。先生のように国境を超えて研究するためには何が必要でしょうか。

今や、科学でも、経済、政治でも、一国では何もできず、国々が関わって初めてなし得る時代です。そのためには価値観や情報伝達の手段、テクノロジーなどをシェアして国同士の協働を進みやすくすることが必要です。日本は島国で、独自の文化や言語を保ってきました。それは良い面でもあります。が、そこは切り離し、日本の常識は世界の常識ではないと割り切って、世界のやり方やルールに従う姿勢を養うこと

が大事です。学生たちには、単に英語が上手になるということではなく、どの国の人もわかり合えるコミュニケーションの能力をぜひ身につけて欲しいですね。

インタビューのコメント

今回は、世界中の研究者に無料で公開している分子系統解析ソフトウェア「MEGA」の開発者である田村先生に話を伺いました。なんとソースコードもご自身



で書かれているんですね。ショウジョウバエを用いた遺伝学のウェット科学と情報学のドライ科学を高度に両立した進化遺伝学を追求する、いわば「ハイブリッド研究者」のさががけです。これからの基礎研究では、バイオインフォマティクスやビッグデータ解析といった情報科学と、実際のデータを取得する実験科学の両方に精通した研究者の育成が重要です。先生の研究室からは、今後の日本の科学を担う人材が輩出され続けると思います。

URA 室 主幹URA 十津川 剛

首都大学東京 総合研究推進機構 HP
インタビューの全文を順次ご紹介します。<https://tmu-rao.jp/miyacology/3869/>

研究と連携／Event & Seminar

首都大学東京の研究と社会をつなぐ活動

Information

分子生物学と進化の国際学会 (SMBE) 2018年 年次大会 プレイベントシンポジウム

2018年7月8日(日) 13:00～16:30(予定)

会場：パシフィコ横浜 3階会議室302号室

主催：首都大学東京

参加費：無料

今号6ページで紹介した田村浩一郎教授(理学研究科 生命情報研究センター長)が組織委員長を務めているSMBE2018の開催にあわせて、同会場にて本学主催によるシンポジウムを開催する。テンプル大学Kumer教授をはじめ第一線で活躍する研究者が進化遺伝学の最新トピックを紹介する予定。シンポジウム参加対象者は研究者であるが、高校生の参加も可能。高校生にとっては研究の世界に直に触れる良いチャンスかもしれない(講演は全て英語)。

●シンポジウム詳細及び参加申し込みは下記URLまで(5月中旬受付開始予定)。

<https://tmu-rao.jp/event/3871/>



年次総会のウェブサイトより

研究成果／Research Result

Personal Mobility

次世代パーソナルモビリティ モックアップ完成!

開発者：難波 治 教授[システムデザイン学部
インダストリアルアート学科]

未来の人力車をイメージしたこのモビリティは、本学が東京都に向けて提案する「2020未来社会研究プロジェクト※」の中で研究開発された。東京を訪れる観光客を想定しているが、小さくて小回りがきくので大規模な施設・イベント会場や、交通弱者の移動支援などでの活躍も期待される。

※「2020未来社会研究プロジェクト」は東京オリンピック・パラリンピックに向けて、本学が独自に東京都への提案と連携推進を図る目的で行う研究プロジェクトである。



パーソナルモビリティのモックアップ



研究のカッコよさって 何だろうっ!

柴田 徹 (URA室 主席URA・主任研究員)

「Miyacology」の対談を担当していると、毎回新たな「気づき (Insights)」をいただける。第1号の気づきは「シャープさ」と「ワクワク感」で、今回の気づきは「多面性」と「カッコよさ」だった。

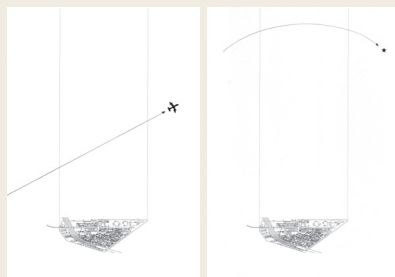
モノゴトを多面的に捉えられる考え方・視点は、従来にない付加価値を生み出しR-STORE、BOOK&BEDという新しいビジネスモデルに帰結していた。その根底にあるのが「カッコよさ」だ。吉川先生が語った「教員の教え方のカッコよさ」や浅井氏が語った「既にあるモノを活かすカッコよさ」「持たないもののカッコよさ」など、何か…生き様、美学、スタイルにつづるすごく大事なコトに触れた気がする。

他方でこの研究広報誌は、一般の人に広く首都大学東京の研究のカッコよさを伝えられているのだろうか? 表紙に始まり、対談、特集、クローズアップ、裏表紙に至るまで、カッコよく仕上がっているのだろうか? どこかに緩み、弛み、スキはないか? 自問自答を繰り返しながら手探りで製作してきた第2号。皆さまにカッコいい研究広報誌と認めてもらえるまで私たち製作スタッフの苦悩は続く。

Art in Tokyo／アートに見る東京 〈首都学〉的美術の読みかた[表紙作品解説]

関川航平

《鳥の数を数える》2017 パフォーマンス
展示のためのドローイング(7枚組)より
紙に鉛筆 各297×210mm



関川航平は私たちを取り巻く環境に対してごく小さな仕掛けを与えることで誰も気づかなかった状況をあらわにする。たとえば、羽田空港に隣接する大田区京浜島で行われたアートイベント「鉄工島FES」では、空を飛ぶ鳥を数えるという行為をパフォーマンスとして行い、そのとき撮影した写真、原稿用紙に綴った言葉などを後日、再構成して複合的な展示にしてみた。

7枚のドローイング連作には鳥のほか上空

を飛ぶ旅客機やドローンなどさまざまな物体が描かれる。鳥を目で追う作業がさらに目に見えない電波や天体の存在にまで達したとき、東京の片隅でかつては重工業を、今は廃棄物処理を支えるこの小さな人工島は、むしろ残された自然や宇宙の物理を感じとれる観測所になる。人は空を飛べないが、無為自然の道が開かれる。

選・文＝補見 清

[システムデザイン学部インダストリアルアート学科准教授]

SEKIGAWA, Kohei / 1990年生まれ。筑波大学芸術専門学群特別カリキュラム版画コース卒業。2017年SICF18 PLAY最優秀賞受賞、個展「以外を見る、を見る」ほか。グループ展2018年「漂白する私性 漂白する詩性」(横浜市民ギャラリー)、「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」(国立国際美術館)ほか。

次号予告 (7月刊行予定)

本学の卒業生で落語家の立川寸志さんと山下英明副学長が対談。大学の教育や研究、広報活動に、落語はどんなヒントを与えてくれるのか。風薫る5月に収録予定。

首都大学東京 総合研究推進機構 NEWS

Miyacology [首都学 (ミヤコロジー)]

第2号2018年 Summer

2018年4月30日発行(年4回発行)

企画・制作・発行:

首都大学東京 総合研究推進機構 URA室

編集: ハル編集所

AD+デザイン: okamoto tsuyoshi +

写真: 増田智泰 (P2,3,4,6,7)

印刷: 株式会社シナノ

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 南大沢キャンパス内 プロジェクト研究棟2階

TEL 042-677-2728 / FAX 042-677-5640

mail ragroup@jmi.tmu.ac.jp

<https://tmu-rao.jp>

© 2018 TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY
首都大学東京

